

同じ穴の貉（「水源地」汚染）

多湖 八朗

翌一九八〇年開催の夏季オリンピックを控え急ピッチでインフラ整備が進められていた当時のモスクワ市内はソ連共産党の一元支配による閉塞感のようなものは若干感じられたものの、街ゆく人々は自分も親もこの世に生を受けた時点で既に社会主義国家の一員であり、幼少から絶えず耳元で繰り返されていた共産主義賛美の教育も功を奏し、およそ世の中というものは大体こんなものなのだろうという諦めと言うより、むしろ納得に近い理解で日々暮らしている人が大半で、そのことが全体的に国としての体裁を保つのに役立つているように見えて落ち着きも感じられた。

もしも人通りの多い通りでプラカードを掲げて反体制的なデモを行えば数分以内に警察や国家安全委員会（KGB）の人間が駆けつけて問答無用で逮捕されたはずだが、そのような不穏な活動が見られることもなく、少なくとも表面的には整然として、規律も守られているように見えた。

モスクワ駐在事務所勤務を命じられた杉山健二が生まれて初めてモスクワの地に立った

のは、一九七九年十一月始めの事だった。

商社の海外事務所の駐在員と言えれば聞こえはいいが、入社して二年目を迎えたばかりの社員でロシア語も片言程度しか話せない人間に商談で成果を求めるには力不足は明らかで、勤務している時間の大半を雑用に費やすのは仕方がないと言えた。当の杉山自身も、若手社員に言葉や仕事を覚えさせ、将来の戦力に育てるという会社の方針を理解していたので、自分は修行中の身であるという意識が常にあった。

雑用の中で一番重要な役目とされていたのは、東京の本社から年に何度もモスクワ入りする社長の身の回りの世話だった。社長は塩分や油分が濃いロシアの料理を苦手にしており口にするには減多になかったため、毎日の夕食は所長宅か、杉山が住んでいる台所付きの長期滞在者用ホテルで限られた材料を用いて作る日本料理を食していたので、彼の口に合う料理を手際よく何品か作ることは大事な役目だった。社長以外にも取引先の役員や部課長クラスの人達がしばしばモスクワを訪れたので彼らの世話をするのも杉山の役目だった。

その他の役目で大事なことは、本社との書類や商品サンプル、カタログなどの受け渡しも重要な仕事で、当時は国際郵便で送ると受け取りまでの日数が非常に長く、さらに途中で紛失する事態も懸念されていたので、郵送に代わる手段として東京とモスクワを行き来する自社の人間か、他社の人間に書類を入れた封筒を預けて運んでもらう「託送」というシステムが中小、大手の商社にかかわらず広く行われていたもので、いつどこの会社の人間がモスクワを発って帰国するのかを適時に把握し、重要な書類を遅滞なく東京の本社に届くように手配するのも杉山の役目になった。

DHLのような民間企業のクーリエサービスがモスクワでも使えるようになるまでにはあと十年ほど待たねばならなかった。

杉山は商談を一人で行うことは出来なかったが取引相手の国営公団に出かけて行き、書類やサンプルの受け渡しを行う役目も与えられた。初めて暮らすモスクワの地で、右も左も分からねば、運転する車のハンドルは左、加えて日本とは真逆の右側通行なので事故を起こさ

ず限られた短い時間内で目的地に辿り着いて書類を渡し、すぐに事務所に戻るのも新米の駐在員には簡単なことではなかった。

モスクワ駐在事務所の所長の鈴木は昼間は電話とアポイントに忙殺されており、ほとんど殺気立っていたので近寄り難く、道順を尋ねられるような雰囲気ではなかった。しかも仕事を終えてからはプライベートタイムもなかなか忙しく過ごしているようで就任して間もない頃は気軽に話ができるような状況ではなかった。とは言え、書類の受け渡しも満足に出来ないことが明らかにすれば「使えない奴」と思われるのは必至で、そう思われるのは本意だったので、車を運転し始めた当初は、事務所の近くの道路を流しているタクシーを捕まえて運転手に封筒に記載されている相手先の公団名を示したり、公団職員の名刺を見てもらったり、その住所に行けるかどうかを確かめ、相場より多目に現金を渡して、タクシーの後を別の車でついて行くから先導して欲しいと頼むと運転手は例外無く驚いたが、このやり方が一番効率良くこの仕事を全うする方法だった。一度の外出で複数の場所に行くこともあったので、比較的短い日数でモスクワ市内の道路事情や道順を覚えるのに役に立った。

大手の商社の場合は現地採用の運転手を何

人も雇っていたので書類の配達を駐在員が自ら行うようなことはなかったが、杉山の会社は対ソ連専門商社と呼ばれていた比較的規模の小さな商社で、日ソ貿易協会という団体の会員企業で、ソ連当局が認められた限られた駐在員枠の範囲で事務所を開設していた関係で、彼の働く駐在事務所で雇用できたのは女性秘書一名のみだった。

杉山がモスクワに赴任する前、本社で過去にモスクワで駐在を勤めた先輩社員達から色々な経験談を聞いていた。その先輩達の中には「ほう、杉山君、いよいよモスクワでポン引きをやるのだね」と笑いながら話してくれる人もいた。社会主義体制と言っても男と女の関係に体制による違いはあるはずもなく、西側も東側も似たようなもので、モスクワで仕事をしたことのある社員や取引先の人間の中には昼間の仕事を終えると夜はロシアの女性達と親交を深める事を楽しみにしている人間も少なからず存在していたのだった。

杉山がモスクワに赴任した日から一週間が前任者の土田と業務引き継ぎに充てられていた。土田は杉山と同期入社で、土田の方は大学四年の時に半年間モスクワ大学に留学しており、採用試験をモスクワで受けていた。そのため言葉はもちろんのこと、現地の事情にも明る

かった。自分がした苦労は出来るだけ後任の人間にはして欲しくないという配慮が随所に感じられ、説明を受けていてありがたかった。杉山が薄手のアノラックしか持っていないのを知ると「そんな格好だとモスクワの冬は乗り切れないよ、去年の一月は零下四十度まで冷えたからね、マローズ（凍寒）だよ。これを置いていくから着たらいいよ」と言って全体がバツクスキンで作られ、襟の部分に毛皮が施された高価なトルコ製の厚手のコート（ドウブリヨンカ）を惜しげもなく渡してくれたのもありがたかった。

引き継ぎが終わり土田が東京に戻る前日に、「杉山君、では今夜はちよつと行きますかね」と笑みを浮かべ夕食に誘われて向かったのが当時カーニンとサドーフオエ・カリツオ（市内環状道路）が交差する付近にあったレストラン「アルバート」だった。

その建物の屋上には大きな地球儀を模したネオンサインが置かれており、広告主はソ連国営航空（AEROFLOT）だった。

その地球儀の広告塔の真下にあつたことからモスクワにいる日本人の間では、このレストランのことを「地球座」と呼ぶ人間も多かった。この広告塔は一九七二年に日本からソ連に輸出されて設置されたもので、対ソ専門商社のI

T通商の社長だったT氏（前年にモスクワで客死）が受注して納めたという話だった。

レストランの中に入ってみると、中の広さに驚かされた。小学校の体育館よりも広いと思われるフロアにバンドが音楽を奏でるステージが設けられ、その横がダンス用のフロアスペースとして広く確保されていた。ダンスフロアの端から出入り口近くまでのスペースには真っ白なテーブルクロスに覆われたテーブル席が間隔を詰めて設けられており、開店当初は定員千名収容を誇り、一階のフロアの他に二階にもバルコニー席が用意されており、楽に五百名以上のお客を収容できそうだった。このレストランがオープンしたのは一九六七年で、当時のギネスブックには欧州で一番大きなレストランとして掲載されていたという記録が残っている。この日のテーブルは空席が多かったが、いくつかのテーブルには若いロシア人の女性が一人で佇みながら出入り口の方を意味ありげに何度も伺っているのが印象的だった。

土田の説明によれば彼女達はウェイターやレストランの出入り口に立っているガードマンに金を握らせ、その見返りとして入店を規制されている一般市民を横目に自由にレストランに出入りが出来て、ウェイターは彼女達が陣取っているテーブルに外国人の男性客を座ら

せるようにするシステムになっているのだと教えられ少なからず驚いてしまった。

レストランで働いている従業員達の殆どがこのシステムを把握しており、口止め料や、何がしかの副収入の恩恵に預かっているということだった。その日はレストランの風景を眺めてロシア料理を食べながら土田と話をしてホテルに戻った。

それからしばらく経ったある日、杉山がこのレストランに予約の電話をして日時を決めた後に、予約係から注文する料理を聞かれたが即答出来なかったのも、東京から出張で来ていた社員のクマさんというあだ名の人間に尋ねると、彼は「料理の予約？面倒だね、クラヴァーチでも言うっておけば」と答えたので杉山が中年とおぼしき女性の予約係に「ではクラヴァーチをお願いします」と言うと、相手は「アハハ、お馬鹿さん」と言っただけで即座に電話を切られてしまった。

横で聞いていたクマさんは吹き出し、「君ホントに言っちゃったのか」と笑っていたので、クラヴァーチの意味を聞くと、それはロシア語でベッドのことだと教えてくれた。

夜の姫君達が集うレストランの予約係にベッドをお願いしますと言えば笑われるのも当然だった。このやり取りは面白かったので、そ

れから何度か予約の電話を入れた際に使ってみると例外なく電話の向こうの相手を笑わせることが出来た。

レストラン「アルバート」でワインやウオッカ、コニヤックを飲み、前菜とロシア料理に舌鼓を打ち、端整な顔立ちでスタイルも良い女性達とダンスや話をして打ち解け、そろそろお開きという頃に彼女が呼んだタクシーに乗り込み、彼女達のアパートメントに行きクラヴァーチの上でもう一段踏み込みさらに親交を深め、一眠りしてから夜明けのコーヒーカー紅茶を飲んで、パンとサラミかハムで軽く朝食を食べしてお別れするというのが大まかなお付き合いの流れだった。

国際都市であるモスクワの市内には数多くのホテルがあるもの、おしなべて監視が厳しく外国人旅行者が多いホテルほど一般市民の立ち入りは制限されていた。日本のようにカッブルが「休憩」したり一泊出来るような施設は無かったので不便ではあったが、こういう機会を通じて普段は知り得ないソ連の人達の暮らしぶりに触れることができた。

モスクワ市民の住居はその殆どが十階以上の集合住宅だった。煉瓦を積んで建てられた建物はかなりの年数が経過していて、新しい建物はコンクリートの分厚いパネルを貼り合わせ

たような造りの建物だった。

夜中にタクシーから降りる時に相方の女性が用心深く左右を伺い、まわりに人気が無いのを確かめる仕草を見ているとこちらにも緊張感が伝わってきた。彼女の後ろについて足早に歩を進めて入り口を通ってエレベーターへと向かう。エレベーターの中は狭くて薄暗かった。階数を示した押しボタンが取れたり破損したり、階数の数字が正しくないボタンも珍しくはないようだった。ボタンを押すとガツツという音で扉が閉まり、昇り始めにガクンと大きく揺れるので初めて乗った人は例外なく胆を冷した。

目指す階に到着してエレベーターから出るといくつもの扉が左右に並び、足音を忍ばせながら静かに目的の部屋の前に着いて扉を開けて中に入ると2DKタイプの部屋が多かった。豪華な家具類は無いものの、部屋はきれいで整頓もされており、寝具類も清潔だったので、様々な国で滞在経験を持つ人は初めてのモスクワでロシア人の民度や高い教育のレベルをこの室内から感じる人も多かった。

一方、彼女たちの方も日本人は清潔で、態度も紳士的な人が多いと好感を持っているようだった。

女性達の中には身の安全を考慮してなのか女友達とペアで組んでいることも多かった。住宅事情が良くないモスクワでは、片方のカップルは寝室に行き、もう片方のカップルはリビングやダイニングの床にマットレスを敷いてというケースも珍しくないという話を杉山は先輩達から聞いていた。

その先輩達の中で一人、自嘲的に「ボン引き」だよと揶揄してモスクワでの使い走りの駐在員事情を説明してくれた人間からは、自分の客人と女性が事に及んでいる最中、自分は何もせずに別の場所で終わるのを待つというのはいかなか侘びしいものなのだという話を聞いていた。杉山は自分がそういう状況に置かれるのは避けたいと考え、女性達の電話番号を手帳に書いておくことにした。

そしてモスクワでの一夜を楽しみにしている客人がやって来ると、あらかじめ手帳にある女性に連絡を入れて夕食を共にするか、夕食後こちらの都合の良い時間に合流できるかを確かめて、打ち合わせた時間にレストランに来るようにと話をつけるようにした。

確かにこれは「ボン引き」と言えた。彼女達にしてみれば素性の知れない相手をおろそかに探して付き合うより安心できただろうし、それはこちらも同様で、大事な客人が夜中に単独で行動していても安心出来るので、双方にとってウィンウィンの関係と言えた。

客人が眠りから覚めたら目玉焼きにハムかソーセージ、そして黒パンと紅茶で簡単な朝食を食べさせてホテルに無事に帰してくれたら、次も世話をするという約束になっていたの、彼女達も文字通り献身的に自分の役目を果たしてくれた。

おかげで杉山は自分が客人と同行して別の部屋で気まずい思いをしながら事が終了するのを待つというような憂鬱な時間を過ごすような目には遭わずに済んだ。

必要に応じ夜中に彼女達に電話を入れ客人をさちんともてなしているかを確かめ、朝食を食べさせて時間までにホテルに帰すようになると念を入れることもあった。

このような「努力」のいかいもあって杉山の駐在期間中にお客がトラブルに巻き込まれたということは一度も無かった。

彼女達は昼間は普通に働いている場合が多かった。杉山の手帳に書かれた電話番号の女性達の中で夜の仕事を専門にしていた女性はいないようだった。それは社会主義国というシステムも影響していたのかも知れない。

学生は別として、健康な成人（ソ連では十八歳）が職に就いていない場合、社会保険料などの支払いが滞ってしまう、そうになると、建国の父レーニンが説いた「働かざる者食うべからず」をスローガンに挙げている当局から目を付けられるというリスクに晒されるのを避けたいという思惑もあったかも知れない。

外国人と付き合うスリルを楽しみながら、自国の通貨（ルーブル）より価値が高い米ドルを獲得して、欲しい品物を買いたい、そのためには外国人と付き合うのも悪く無いという、いわば遊びと欲求を一度に満たすというような感じで行動しているように見えた。

女性達はお互い同士を名字や名前ではなく愛称で呼びあっていた。ナターシャ、ターニヤ、リューダ、リタなど、それが実際の本名に由来するかどうかは分からなかった。

一方、お相手となる男性の呼び名も日本の名前や名字は発音しづらく覚えるのも難しかったので、サーシャ、アリオージャ、トリーヤなど勝手にロシアの男性の愛称を名付けていたが、呼ばれた方もちゃんと返事をしているのを見るのは面白く感じられた。

ここで杉山の駐在期間中にあつた女性にまつわるいくつかのエピソードを紹介しておく

たいと思う。

エピソード・その1 「鮫肌ニーナ」

レストラン「アルバート」にはその手の女性達が数十人はいたであろう。別のレストランや外国人が宿泊するいくつかのホテルの中にあるレストランやバーも同様の状況だったらしく、何カ所かをかけ持ちしている女性も中にはいただろうと思う。

そんな女性達の中に、「鮫肌ニーナ」と呼ばれている女性がいた。杉山もある時、あれが（社員の間では有名な）「鮫肌ニーナ」だよと教えてもらった。女性達の中ではかなり年上のようを感じ、どう見ても三十才より前には見えなかった。名前の由来は触ってみると肌がざらざらとしていてまるで鮫の肌のようなので、いつしか彼女の事を鮫肌ニーナと呼ぶようになったという話だった。

杉山の会社が初めてモスクワに事務所を持った当時から彼女は姿を現していたらしく、役員がSがその昔、何度か彼女のお相手をしたという噂が社内で流れており、若い社員達はSと兄弟になるのは御免ということまでニーナを相

手にすることは無いという話だった。

エピソード・その2 「ラブドール事件」

杉山が赴任する前年にモスクワに建てられている全ソ労働組合系の複数のホテルに日本製のコンピューターと宿泊予約システムを併せて導入する契約が決まっており、杉山が赴任後に一連の設備（ハードウェア）とソフトウェアの納入が始まった。ウインドウズはおろか、DOS・Vすら存在しなかった頃の話である。そのため、コンピューターシステムの設置と始動調整、オペレーターや補修担当者の教育などを行うために日本からハード関係とソフト関係のエンジニア達が毎週のように入れ替わり立ち替わりにモスクワを出入りする日が半年近く続いた。彼らは全員熱心に作業に取り組んで非常に高いレベルの能力を示しただけではなく、まじめな勤務態度と仕事への姿勢が高い評価を受けていた。

そんなある時、技術者達が宿泊しているホテルのある部屋を掃除に来たメイドがベッドの下を掃除しようとしたところ、素足がよつきりと出てきたためメイドは肝を潰し息が止ま

るほど驚き大声を上げ警察を呼ぶ騒ぎとなった。しかし、警察官が来てベッドの下から出ている脚を調べると、それは人間ではなく人形だと分かり、その場で捜査は打ち切りとなった。パトカーが数台、警察官も多数駆けつけ、現場は立ち入り禁止となり、一時はものものしい騒ぎになったらしい。

杉山達はその話を聞いたのは事件から何日か経った後で、話を聞いた時には吹き出したものの、次第に事件を起こした人間が気の毒になり自分に相談してくれば血の通った女性を紹介出来たのと思ったらしい。

しかし騒ぎになった部屋に誰が住んでいたのかについては詮索しないことにした。

この事件が発生した以降、技術者達はモスクワの生活にも慣れ、ガールフレンドを作り休日にデートや、ピクニックにでかけたりする人間もいるようになった。

エピソード・その3 「空港税関に於ける大人の玩具事件」

コンピューター技術者の送迎も杉山の仕事のひとつになっていたが、ある時、技術者達のまとめ役であるチーフを出迎えにシエレメーチェボ国際空港に行った。

入国審査を終えた旅客が預けた荷物を受け取りに集まる楕円状のベルトコンベアーが見える位置に立ち、通関検査を終えた旅客達が必ず通る到着ホールのところではしばらく待っていたが、旅客の大半が通関を終えて出て来た後もチーフは出てこなかった。一時間以上経っても到着ホールに出てこなかったので妙だなど思いつつ、本来は旅客以外立ち入り禁止の税関スペースの内側からしか開かない仕組みの曇りガラスの自動ドアが開いた時に本人がいないかどうか探してみると、当人が税関の女性から叱責を受けているのが見えた。

当のチーフも杉山の姿を認め、大きく手招きしつつ、手の平を合わせて拝む仕草で、頼むからこちらに来て欲しいと懇願しているように見えたので、ドアが閉まる前に入って一番近くにいた税関員に特別に入場の許可を求め、許されて彼に近づいていくと、「杉山さん、大変申し訳ない、ちよつと困ってしまって……」と真つ赤な顔をしてうつむき加減にこちらの方を伺うので、横に立っていた三十歳半ばと思われる女性税関員にどういう状況なのかを尋ねてみると、その女性税関員は待つてましたとばかりに声高にきつい口調で、「この人間は我が国にいかがわしい物品を持ち込もうとした、密輸をしようとしたのだ」とまくしたてた。彼

女の顔を見ていると彼女もまた少し頬を赤くしながら話していた。そこで彼女が持っている白い箱に目をやり、「申し訳ありませんが拝見できますか」と尋ねると、その女性税関員は見るのも汚らわしいという感じでこちらに箱ごと寄越したのでフタを開けてみると、脱脂綿に包まれた肌色のようなピンクがかかった一目で男性のシンボルと分かる物が目に飛び込んできたので杉山も思わず息を飲んでしまった。啞然としつつも、この場を収めて早く立ち去らねばならないと考え、こうした場面では笑い顔を見せると逆にこじれてしまうかもしれないと考え、笑いたいのをこらえ、努めてまじめな口調で、「この度は大変申し訳ないことをしました。彼はモスクワに来るのは初めてなので、当地の状況に不案内なのです。麻薬や武器の密輸とは違うのでここは穩便にお取り計らいをして頂けないでしょうか？」と腰を低くして頼むと、既に時間もかなり経っていたこともあったためか、彼女も落ち着きを取り戻したようので、物品は没収ということで決着がついた。本来は罰金に始末書のような書類を書かされても仕方がない状況だったが、没収の処分のみで実質的には無罪放免となり杉山も安堵したのだった。

実際のところはこのチーフは既に何度もモ

スクワを訪れていたのだが嘘も方便だった。

日本人はトラブルの時に笑みを浮かべることが多いが、それは外国人相手の場合は事態をさらに悪化させかねない。こんな状況でお前は どうして笑っていられるのだ？ 自分を馬鹿にしているのか？ このトラブルを軽く見るのか？……などと誤解されかねないので注意すべきだと改めて思ったのだ。

エピソード4 「空瓶ルーレット」

杉山が本社勤務の時に仕事で懇意にしていた大手水産会社の役員と次長がオホーツク海で行われるカニの日ソ共同漁労プロジェクトの商談のためモスクワ入りした。この次長は主として洋上での仕事をしてきたので、杉山の顔を見るなり、きっぱりとした口調で「杉山さん、昼の仕事も大事だけど、夜の方もよろしくお願いますね」と念を押してきた。

丁度その時、杉山と同じ大学のOBで二年後に入社してきた後輩の小村もモスクワ入りしていたので、仕事の目処もついた日に、では参りましょうかということになり、三人でレストラン（勿論アルバートだ）に出かけることになった。次長が慣れた感じで見初めた女性を杉山に教え、杉山は彼女は初めて見る顔だと思

いつつ近づいて話しかけ、今夜は時間が取れるかと尋ねてみると、勿論という返事なので男性三人、初めて会う女性数人で二台の車に分かれて彼女のアパートメントへと向かった。部屋に入ってお互いに軽く自己紹介をして、例によって適当にロシアの名前で自分はサーシャ、この人はトリーヤ、彼はアリオージャだと名乗り、向こうの名前を聞いて酒宴が始まった。船に乗っていた次長は酒に強くアルメニア産のコンニャックが注がれたリユームカ（脚付きグラス）をぐいぐいと飲み干し、あつという間に二本目の瓶が空になると、その場を仕切っていた女性のアラが立ち上がり「さー、みんな絨毯の上に腰を下ろして下さい。これからルーレットを始めます」と宣言した。

何をやるうとしているのか理解出来ず、彼女の指示通りに椅子から降りて絨毯に腰を下ろし、一同が車座になって座ると、アラが「じゃあ最初は私が」と車座の真ん中で空になった瓶を横に倒して駒のようにクルクルと瓶を回転させ、回り終わるとその空瓶の先に座っている人間に命令口調で、「はい、あなたは一枚脱ぎなさい」と命令。言われたのは女性の中の一人だったので、彼女が靴下を脱ぐと、「はい、次の人、回して」とまた同じように空瓶を倒して回転させ、回り終わって瓶の先が向けられた

人間が身につけている物を脱いでいく、また一人、さらにまた一人、これが延々と続き、最後は全員が裸か、ほぼ裸の状態になってしまった。こんな経験をしたことは初めてで、いわばロシア版の野球拳だった。

杉山が約一年の駐在期間を終えて東京に戻り、この次長に会った時に、「杉山さん、あれは面白かったね、また一緒に行こうよ」と言われたが、結局は一度きりになってしまった。

杉山が会社の先輩である人にその話をして、同様の経験があるかどうかを聞いてみると、「いや、そんな経験、僕はしたことが無いよ、初めて聞いたよ。すごいね、乱交パーティーみたいなものだね。まあ僕は取っ替え引っ返えするよりも一人とじっくりの方を好むけどね。でも人それぞれ好みがある訳だから、それはそれでいいんじゃないの。言うなれば、同じ穴のムツシーナだな」と答えた。

別に、取っ替え引っ替えをしていた訳じゃない、変な誤解はしないで欲しいと思っただものの「同じ穴のムツシーナ（仏語のムッシュと同様、ロシア語で男性の意味）」という言い表し方がおかしかったので、声を上げ笑ってしまったのだ。

あれからもう四十年以上経ってしまった。時が経つのは本当に早い。（了）